

ランドスケープと住環境の構造

— 出島六町と長崎の奥性 —

佐々野 好 継¹⁾, 山 下 恭 徳²⁾

Landscape and the dwelling environmental structure
—‘DEJIMA/ROKUCHO’ and the ‘Depth’ in Nagasaki—

SASANO Yoshitsugu¹⁾, YAMASHITA Yasunori²⁾

1. はじめに

1.1 背景と目的

日本の社会は人口減少や少子高齢化が進み、一方では近年の気候変動による災害などが社会問題となっている。さらに、地方において、公共施設の老朽化や建て替えに伴う移設の問題は、経済面も含めて重要な課題であるが、日常生活圏では動線の変化を伴う。公共施設が災害時の避難場所を担うという意味からも新たな対策が求められている。このように、日本の都市における住生活や住環境は大きく変容してきている。

本研究の対象地である長崎市も同様である。長崎市中央部において、公共施設であり、近代建築の象徴であった長崎県庁（江戸町）が、尾上町へ移転した。長崎市市役所も耐震性を踏まえた建て替えが決定し、旧公会堂跡地への移設が予定されている。さらに、長崎市における公立小・中学校では統廃合等が進められている。

このような社会や自然環境の変化は、都市における住環境の計画・整備計画をたてる時、持続可能な社会を構築するあたって、重要な課題となる。この課題解決には、地域の住文化やそれを背景として成立する住環境の構造を明らかにすることが前提となろう。また、これらの諸問題に対しての住環境の計画や整備の在り方は、都市の構造と関連付けて考えられる必要がある。住生活は、自然環境を前提とする中で地域に住まうことであり、同様に、住環境は、都市動線の形成や都市の発展、新たな都市形成に影響する。

日本においては「奥」という概念や思想があり、それが、都市や建築空間に見出されるという研究報告がある（*4）。しかしながら、上記の諸問題に対する都市構造や住環境に関連する研究は、生活科学分野では、十分に展開されているとは言えない。

本研究では、長崎市を対象地とした自然景観と住環境の構造を明らかにする。更に、持続可能な都市における住環境の在り方・住まうことを自然や生活関連施設の立地及び都市動線の視点から総合的に考察し、これからの地域・まちづくりを提案したい。

1) 長崎大学人文社会科学域（教育学系）

2) 長崎大学生命医科学域（歯学系）

1.2 長崎市の景観・住環境

(1) 長崎市の風土と自然—照葉樹林—

長崎市は、同市の行政政策の一つとして景観を(1)自然景観、(2)社会景観、(3)歴史景観の3つに区分し展開している。

(1)自然景観については、「全体が温暖帯南部に属するため、スタジイ林、アカガシ林、ヤブツバキなどの冬でも葉を落さず一年中緑色をしている常緑広葉樹の生い茂る照葉樹林が発達している」点を挙げている。

本論は、この照葉樹林が存在する地域の住文化と住環境の関連に着目する。

(2) 長崎市の景観

長崎市の景観を樋口は『景観の構造』(*1)の中で、「長崎は、両側から山が迫った入江で、入江に面した斜面は互いに見る見られるという関係が強く、空間的にも、意識的にも狭いといえるところである。ここで雨は、空間的な奥行きを出すとともに、見る見られるという強度の視覚関係をやわらげているといえることができる。また、石畳のテクスチャーは、雨を受けて息づくという効果と共に、距離感・奥行き感が増大する効果がある。」と述べている。さらに、空気遠近法による「奥行」の評価点の高い地域として、奥入瀬、那馬溪、苔寺などと同じく長崎市も挙げている。(*1) (図1)

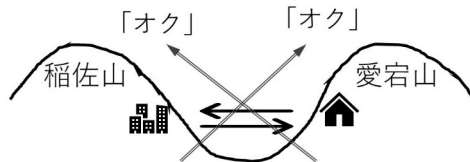


図1 空気遠近法による「奥行」知覚

(3) 長崎開港—出島六町と岬の教会—

元亀2年(1571年)、長崎港はポルトガル貿易港として開港される。長崎港開港に伴い、各地から貿易商人やキリシタンが移住した。現在の万才町や江戸町とその一帯が造成される。長い岬の先端は、夏は草が茂り「草原」、冬は麦畑となる畑地であった。この場所に、町建てとして、横瀬浦、文知町、外浦町(外浦大瀬戸)、平戸町、大村町、島原町の六町が造成された。いわゆる、「出島六町」である。文知町を除く5つの町は住民(キリシタン)の出身地や統率した人物名、残る一つは役所の意の分知(文知が由来等、諸説あり)。また、町建てが進む中、岬の先端にはポルトガル人と日本の信者のための小聖堂(サン・パウロ教会)が建てられた。この小聖堂は「岬の教会」と呼ばれていた。

1.3 関連研究と本研究の位置付け

(1) 景観の構造

「ランドスケープと住環境の構造」に関する研究には、樋口忠彦：『景観の構造—ランドスケープとしての日本の空間』(*1)、ケヴィン・リンチの『都市のイメージ』(*2)

及びノルベルグ・シュルツ『実存・空間・建築』（*3）などがあげられる。まず、樋口は『景観の構造』の中で、「ランドスケープの空間は、境界、焦点・中心・目標、方向、領域の4つの要素により構成され、領域は、以上あげてきた「境界、焦点・中心・目標、方向」の3要素により秩序づけられ、関係付けられたところの領域である」と述べている。また、ケヴィン・リンチは、『都市のイメージ』の中で、都市のイメージを構成する要素として、「1.パス、2.エッジ、3.ディストリクト、4.ノード、5.ランドマーク」をあげている。さらにノルベルグ・シュルツは、『実存・空間・建築』の中で、実存的空間の諸要素として、「中心と場所、方向と通路、区域と領域」の3要素をあげ、諸要素間の相互作用が重要であると指摘している。これらは、都市構造に関する基礎研究とされている。

特筆すべきは、樋口は『景観の構造』の中で、環境空間における地形の空間構成的役割について述べていることである。しかし、日本の典型的な地形空間を7つの型にまとめているものは、軸線を活用した構造的な分析手法までは至っていない。

（2）都市の奥性に関する研究

都市の「奥性」に関する研究としては、まず、横文彦の『見えかくれする都市』があげられる。横文彦は、『見えかくれする都市』の中で、「日本の文化は照葉樹林に覆われた山の中に「奥性」を見出し、その奥に至る経路を儀式化する形で鳥居が生まれ、「奥」そのものの象徴として床の間を創造する（「都市を見る」, p31）」と述べている。また、横は、東京・江戸の町が自然条件の上にどのような都市を形作ってきたかを、「道の構図」, 「微地形と場所性」, および「町の表層」などの視点で構造的に分析し、都市の「奥性」を報告した。

しかし、これは1980年代の東京を対象地として行った研究であり、その分析では、「クチーオク」の空間軸という空間分析手法は用いていない。

（3）都市の住環境における「クチーオク」空間軸の分析手法（*5,6,7）

1. 調査対象地の住環境における「四方向」に位置する代表的なランドマークに着目する。
これは、上述の『都市のイメージ』を構成する要素の一つ「ランドマーク」に着目したものである。
2. 次に、四方向のランドマークと交差するように2本の軸線を設定する。
3. 設定した交差2軸による交点と4領域が定まる。交点の近傍の領域を「クチ」、各領域における斜めの方向を「オク」とする空間軸で分析する。

なお、分析方法は、長崎県五島市の農村住居における空間構造及びその構成原理の研究で明らかにした分析方法を採用し、住居学の研究論文として既に発表したものを、本研究では都市空間に応用するものである（*8,9）。

2. 長崎市における住環境の構造と自然の地形（図2）

2.1 はじめに

長崎市の自然景観の四方向における代表的なランドマークに着目する。北に金毘羅山、南に長崎湾、西に稲佐山、東に愛宕山が存在している。

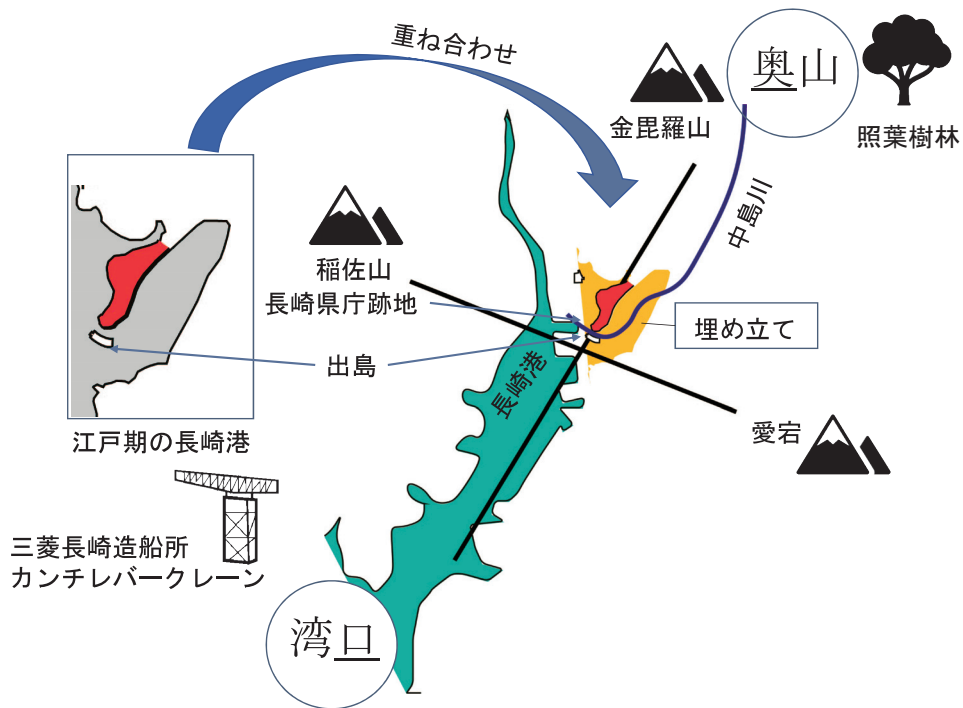


図2

(1) 金毘羅山

金毘羅山は、「瓊々杵尊（ににぎのみこと）降臨」の地との伝承をもつ神体山で古くは「瓊杵山（にぎやま）」、中世では「崇獄（たかだけ）」、近世に至り「金毘羅信仰」の進展とともに「金毘羅山」と呼び名を改めてきている。同じ山でこのように呼び名を変えていくことの背後には山を見上げる人々の信仰の変化を見て取ることができる」と安野は『港市論』の中で述べている（*10）。「金毘羅山—金毘羅神社—御旅所」の3つの聖地を実際の集落上にトレースすることが出来ることから、長崎の江戸期における信仰の軸といえる。それらの位置関係や機能から金毘羅山は、長崎の集落の「奥」である（*4）。

また、金毘羅山は「春になると、山頂直下の草原ではハタ揚げ大会が催され、秋になると草原に広がるススキの穂が美しく、家族連れ、小中学生のハイキングの山として四季を問わず親しまれている（*11）。

以上のことから、金毘羅山は、長崎市の奥を象徴する山であると同時に、長崎市民に親しまれている山でもある。すなわち、金毘羅山は、長崎市の最も象徴的なランドマークであると位置付けられる。

(2) 稲佐山と愛宕山

稲佐山は、世界新三大夜景のひとつであり、江戸時代においては、「長崎八景・稲佐夕照」として、当時の市民に親しまれてきた。また、愛宕山も「長崎八景・愛宕暮雪」として、市民に親しまれてきた。それは、現在も継承されている。

2.2 交差2軸と「クチーオク」の空間軸

交差2軸を用いて分析を行うに当たり、軸線を用いて都市の構造を明確にすることは、都市計画の研究領域では、一般的な方法である。

1. 金毘羅山と長崎湾を結ぶ。金毘羅山を「山」、長崎湾を「海」とする「山—海」の空間軸が設定できる。

これは、人間と自然との関わりから、長崎湾を「湾口」の「クチ」、金毘羅山の「神体山」を「オク」とする「クチーオク」の空間軸が存在していることを意味する。

2. 愛宕山と稲佐山を「軸線」で結ぶ。位置関係や空間の方位性から、稲佐山を「西」、愛宕山を「東」とする「東—西」の空間軸が設定できる。
3. 2つの軸線を交差し、これによって、4領域が成立する。なお、交差2軸の交点には、長崎港が位置する。交点は、港口の「口」から入口の意味合いを有し、「クチ」の領域を帯びているといえる。

3. 交差2軸を用いて分割する長崎の4領域

3.1 はじめに

2.1(3)で示した軸線を用いる方法は、都市や地域の構造を明確化すると同時に空間の異质性などの性質を明らかにするために有効な手段である。そこで、この軸線を用いて成立する①全体の2分割で成立する2領域、②全体の4分割で成立する4領域と分類して、各領域における地名、川、山などの呼称の相対性に着目し、分析する。

3.2 長崎湾と金毘羅山の軸線で2分割される2領域

(1) 東領域エリア (第1象限+第4象限)

東領域エリアにある主なランドマークは愛宕山である。そして、愛宕山と金毘羅山との間に中島川が流れている。この中島川は、ケビン・リンチのいうエッジであると考えられる。また、長崎湾と愛宕山の間に大浦川が流れている。大浦川を介して東山手と南山手の地名が相対的に存在している。大浦川も、エッジの機能を有している。

(2) 西領域エリア (第2+第3象限)

西領域エリアにある主なランドマークは稲佐山である。稲佐山と金毘羅山との間にエッジとしての浦上川が存在している。

また、このエリアには、曙町、秋月町などの地名があり、曙と景観との関わりがある呼称、すなわち、地名と方位との関わりから、この領域は、「西領域」エリアであることがわかる。

3.3 長崎湾と金毘羅山、稲佐山と愛宕山の交差2軸で4分割される4領域

(1) 浜町・中島川エリア (第1象限)

東領域における浜町・中島川エリアの4領域の交点の近傍には、築町、賑町、浜町などがあり、山手側に桜馬場、夫婦川などがある。そして、鳴滝が立地している。また、交点の近傍は、歴史的には「出島六町」が存在していた場所と同一である。出島六町は、主に、長崎市以外の人々が住んでいた場所である。すなわち、この領域はクチの領域を有している。

(2) 浦上山里村 (第2象限)

西領域における浦上山里村のエリアは、浦上などの地名が含まれる。浦上川が川から海(長崎港)へと流れることから、浦上をオク、長崎港がクチと考えられる。すなわち、4領域の交点の近傍が、長崎港の「港口」のクチ、浦上より山手の方向がオクである。

(3) 三菱開港エリア (第3象限)

西領域における三菱開港エリアには、水の浦、岩瀬浦、塩浜と地名から、以前から、海に隣接する地域であったことがうかがえる。よって、4領域の交点から見ると塩浜などがクチの領域にあたり、その延長上に神の島が位置する。神の島には教会が存在している。神の島はオクの領域と言える。

(4) グラバー園・唐人屋敷エリア (第4象限)

東領域におけるグラバー園・唐人屋敷エリアには、上小島、中小島の地名が含まれる。地名から見ると、上小島と中小島は、上・中が付いており、その立地は山手側に中小島、上小島の順で地名分けされている。さらに、交差する形で東小島、西小島の地名が相対的に配置されている。すなわち、小島には、「上一中(一下)」の軸と「東一西」の軸が交差する形で存在している。よって、長崎港をクチ、上小島の方向をオクとする「クチーオク」の軸が存在している。

3.4 自然のランドマークにおける「クチーオク」の軸

(1) 浜町・中島川エリア

浜の町・中島川エリアのランドマークは、長崎港と烽火山である。長崎港は、全体の中心点の近傍に存在しクチ領域である。烽火山は北北東に位置し、金毘羅山と愛宕山の間にあり、クチ領域の長崎港から烽火山を展望した場合、対角線上に烽火山が位置付けられることからこの直線状のラインには、長崎港をクチ、烽火山をオクとする「クチーオク」の空間軸が存在しているといえる。

(2) 浦上山里村エリア

浦上山里村のランドマークは、長崎港と岩屋山である。長崎港は、全体の中心点・クチ領域にある。岩屋山は北西に位置し、金毘羅山と稲佐山の間にあり、クチ領域の長崎港から岩屋山を見た場合、対角線上に岩屋山が位置付けられることからこの直線状のラインには、長崎港をクチ、岩屋山をオクとする「クチーオク」の空間軸が存在しているといえる。

(3) 三菱開港エリア

浦上山里村のランドマークは、長崎港と神の島である。長崎港は、全体の中心・クチ領域にある。神の島は、西南西に位置し、稲佐山と長崎湾との間にあり、クチ領域の長崎港から神の島を見た場合、対角線上に神の島が位置付けられることからこの直線状のラインには、長崎港をクチ、神の島をオクとする「クチーオク」の空間軸が存在しているといえる。

(4) グラバー園・唐人屋敷エリア

グラバー・唐人エリアのランドマークは、長崎港と唐八景である。長崎港は、全体の中心・クチ領域にある。唐八景は南南西に位置し、愛宕山と長崎湾との間にあり、クチ領域の長崎港から唐八景を見た場合、対角線上に唐八景が位置していることからこの直線状のラインは、長崎港をクチ、唐八景をオクとする「クチーオク」の空間軸が存在しているといえる。

4. 考察

4.1 長崎市街地のクチ領域とオク領域（*14）

(1) 長崎市の中心市街地（商業地域）は、江戸時代、「市中（内町・外町）」と呼ばれていた。長崎開港時には、入りこんだ海であった。すなわち、現在の中心市街地は、その当時の埋め立てによる陸地であり、発展してきた（*12）。また、長崎県庁跡地は、入りこんだ海の中にある細長い岬の先端であった。

この「市中」の領域とは、本論で展開する交差2軸によるクチ領域と同じ位置関係にある。空間の性質の視点からみると、埋め立て前の地形の陸地の部分が「オク」領域と考えられる。クチ領域は、長崎豪雨災害時（1982年）においては浸水地域であり、この被災した領域は、埋め立て領域とほぼ合致する。

「市中」がクチ領域、以前からの陸地・郷がオク領域であることから、「クチーオク」の空間軸が成立すると分析できる。

(2) 「市中」のクチ領域、埋め立て前の地形の陸地の部分の「オク」領域の「クチーオク」の空間軸が、図1に示す、空間遠近法による奥行きを認知させると同時に、奥行知覚としての空間の異方性の認知に繋がっていると考えられる。

(3) 現在の県庁通りにはサン・パウロ教会（岬の教会）やサント・ドミンゴ教会などが立ち並んでいた。その県庁道路のラインは直線であり、「出島六町」のある岬の先端が「クチ」、金毘羅山が「オク」とする軸線であると考えられる。

また、「出島六町」の領域における交差2軸を用いた分析では、外浦町が「クチ」、大村町を「オク」とする「クチーオク」の空間軸が存在し、それと直交する形で島原町・文知町を「東」、平戸町・横瀬町を「西」とする「東ー西」の空間軸が存在している。この場合、「外浦町ー大村町」の「クチーオク」の軸線が主軸で、「東西」の軸が副軸であると考えられる。

(4) 「出島六町」における町割りの構造と、長崎市における住環境の構造は、上・下の「クチーオク」の空間軸、左・右の「東ー西」の空間軸が共に交差する交差2軸の形で確認できた。すなわち、これは、「住空間の構造」は、住環境レベル、住居レベルの諸段階においても同じであると言える。

4.2 自然型都市に向けての原風景と考察

(1) 県庁跡地と原風景

4.1で述べた事柄は、長崎市の原風景からまちづくりを再考することが重要であることを考えさせられると同時に、県庁跡地が自然災害時における最も安全な避難場所であると読み解くことができると考える。

4.3 総合的な学習の時間と「まちづくり」

(1) 持続性社会の構築と学習指導要領

総合的な学習の時間における探究課題の一つに、地域や学校の特色に応じた課題があり、その課題とは、「町づくり、伝統文化、地域経済、防災など、各地域や各学校に固有な諸課題のことである」と示されている（*13）。

したがって、総合的な学習の時間において「地域に住まうことを考える」ことは、地域の住環境を前提とする地域や学校の特色に応じた課題の一つに該当すると考えられる。また、児童・生徒の社会性の育成や住意識の育成の視点からも重要なテーマである。（*14）。

(2) 環境認知マップ

長崎市のN小学校において、児童・生徒の日常生活と関係が深い学校周辺の環境認知マップ調査を直交2軸のワークシートを用いて行ったところ、大部分の児童・生徒がランドマークを基準に環境認知を行っていることが明らかになった。また、グループ学習において話し合いが活発になり、認知が広がった結果を受けてランドマークを認知することは、環境認知がひろがり、児童・生徒の地域への愛着につながる事が実証できた。（*15）。

5. まとめ—長崎港を交点とする都市4領域—

1. 長崎市の景観・ランドスケープは、長崎湾の「湾口」を「クチ」、金毘羅山を「オク」とする「クチーオク」の空間軸（広義）が構成原理にあることが明らかになった。また、長崎市の住環境には、稲佐山を「西」、愛宕山を「東」とする「東—西」の軸が存在し、上記の「クチーオク」の軸と重ねると、交差2軸の4領域が成立し、その交点に長崎港が位置付けられることが明らかになった。また、各領域にはそれぞれの「クチーオク」の軸が存在することが明らかになった。

4領域における空間性質では、長崎港が含まれる「三菱・開港エリア」がクチ領域、「浜町・中島川エリア」が、奥山の地名も存在し、長崎のオク領域だと考えられる。

2. 交差2軸による分析では、交点領域の商業地域を、クチ領域、これに対して、交差2軸を45度傾斜したライン上において、交点から延長された線上で、かつ、交点と対角と位置関係にオクは存在する。また、歴史的視点では商業地域は江戸時代の出島六町を含む「市中」の領域と基本的に対応していることが明らかになり、それぞれの領域に奥性が存在することが明らかになった。この「クチーオク」は、過去、丘陵地であり、防災上重要な役割を担っている。現在の長崎市内で路面電車が走っている場所は過去、干拓された歴史を有することも分かった。大地や山・台地、海・川などの自然地形は、都市形成の重要な前提条件であることが明らかになった。

6. 今後の課題

「5.まとめ」を踏まえて、近年の気候変動などに対応できる住環境の在り方は、「奥性」を意識した住環境の計画が求められると考えられる。さらに、「歩く」を主体にした住行為を分析することや、まちづくりや教育における「総合的な学習の時間」での住環境を扱う教材として、「クチーオク」が元々の地形を利用し形成された歴史的背景を説明するの

には、格好の素材である。「クチーオク」による交差2軸に基づく分析は、持続性社会の構築の視点においても、防災を含めた、これからの都市形成の視点においても重要であり、更なる研究が必要である。

謝辞

本論文をまとめるにあたり、資料整理のお手伝いと貴重な意見をくれた共同研究者の柳紀子さん、ありがとう。

関連文献

1. 樋口忠彦, 景観の構造—ランドスケープとしての日本の空間—, 技報堂出版, 2017
2. ケビン・リンチ, 都市のイメージ, 岩波書店, 2019
3. ノルベルグ・シュルツ, 実存・空間・建築, 鹿島出版会, 2010
4. 横文彦 他著, 見えかくれする都市, 鹿島出版会, 2019
5. 佐々野好継, 長崎市における地域景観の構造, 日本建築学会, 都市計画委員会, 都市形成・計画史小委員会, 29-30, 2005
6. 佐々野好継, 長崎市における住環境教育に関する研究—出島六町と浦上山里村—, 長崎大学教育学部教科教育学研究報告, 第43号, 93-97, 平成16年6月
7. 佐々野好継, 家庭基礎との横断的な学習による総合的な学習の時間—長崎市における地域景観の構造と住環境, 長崎大学教育学部紀要, 第4集, 247-249, 平成30年2月
8. 佐々野好継, 長崎県五島市における住居の型とその型と構成原理—四つ間型と中廊下式の住居, 日本家政学会誌, vol.57, no. 1, 31-38, 2006
9. 佐々野好継, 長崎県五島市におけるアダノマを中心とした住空間の構造と変遷, 日本家政学会誌, vol.57, no. 7, 487-495, 2006
10. 安野真幸, 港市論, 平戸・長崎・横瀬浦, 日本エディスクール出版部, 1992
11. 山野辺かつお・他著, 長崎県の山, 山と溪谷社, 2017
12. NHK「プラタモリ」制作班監修, ①長崎・金沢・鎌倉, 角川書店, 2016
13. 文部科学省 小学校指導要領(平成29年告示)解説, 総合的な学習の時間, 東洋館出版社
14. 佐々野好継・山下恭徳, 学校教育を介した「持続する」地域居住・まちづくり, こども環境学研究, vol.15, no. 1, p64, 2019
15. 山下恭徳・佐々野好継, 小学校教育における生活圏と空間認識の広がりに関する学習の教材開発—校区を4区分した「田の字形」構想, 日本生活科・総合的学習教育学会, 令和元年度第28回全国大会大分大会, P.174, 2019

